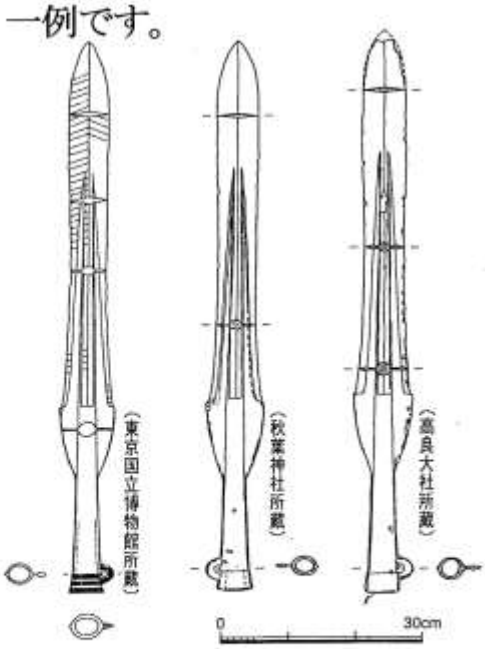
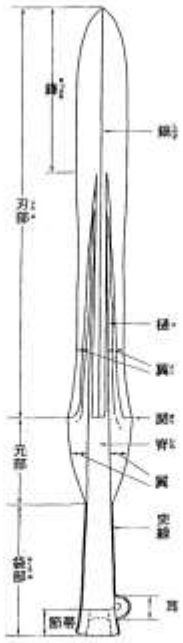
天神浦出土銅矛

銅矛は、弥生時代の武器形青銅器です。マツリの道具として悪霊をはらうために使用され、墓から副葬品として出土する例や、地鎮のために土中に埋納される例があります。

日本考古学史上に登場する広川町の『天神浦遺跡』では、元禄１０（1697）年に藤田村の溜池（天神浦堤）築造の折りに銅矛 13 口が出土し、それより 25 年後の享保７年に同村内の溜池（田代堤）の浚渫工事中に銅矛 5 口が出土しています。銅矛の型式は中広形銅矛で、弥生時代後期前半代に属します。残念ながら 18 口の銅矛は広川町には１口も残っておらず、箱書きにより天神浦出土に相違ない 2 口はそれぞれ久留米市高良大社と同市秋葉神社の御神宝になっています。さらに、天神浦堤出土の可能性がある銅矛が海を超えてイタリア・ジェノバ市東洋美術館所蔵になったりと各地に散逸している状況です。『一條森園遺跡』が近隣の大規模な弥生時代集落になりますが、墓の内容からもこうした青銅祭器を埋納するような富裕で傑出した集団ではなかったようです。いずれにしても、当時の人々の祈りが込められた祭器の出土が現代ではなく江戸時代に見られ、遺物は各地に伝世品となっている一例です。



天神浦遺跡出土銅矛実測図



銅矛の各部名称

高良大社所蔵　天神浦遺跡出土銅鉾

時代【弥生時代Ⅱ】